

私の名前はカーラ・オパールです。金星から来ました。年齢は八百歳です。金星人の寿命は千歳が平均寿命なので、あと二百年は生きられます。最近、というより宇宙人や未確認飛行物体、つまり UFO に再び興味が向けられているようですね、地球の皆さん。

それで、我々宇宙人は地球を監視していて、愛と平和の地球にするために活動しているとされているようです。まあそういう金星人もいないことはないですけど。わたしの場合、もっぱら愛の方の目的だったんです。

自分で言うのもなんだけど、金星にもある鏡で自分の姿を惚れ惚れと眺めて、自分は完璧な美を持っているのでは、と思いました。

特に風呂を出てから身長より高い鏡を見て、全裸の姿態を見つめます。髪は金髪でアンダーヘアも金髪なんです。濃いヘアなんですけど、おまんこのあたりはあまり生えてなくて、ぷっくり膨れた割れ目にピンクのスジが入っています。

八百歳ですけど、金星人は男も女も九百歳にならないと老

化現象が始まりません。二十代が九百歳まで続くんです。これは、もともとからではなくて、金星の発達した医学がもたらしたもののなのです。

だから、わたしの白い肌と豊満な乳房と、お尻のふくらみ、腰のクビレは地球人の女性の二十代、私の場合、二十歳になったばかりの体をしています。

自分で見ても、わたしのおまんこは男が見てすぐ勃起する形をしているのです。左右対称のまんこというより左側が少し大きめに膨らんでいます。この均一でない形が男の慾望をそそるらしいわ。

あまりにもずれていると、つまり均一性がだけど、云ってはなんですけど不具者になります。でも、まんこのビラビラが正確に同比率で膨らんでいるのも男の性欲を引き起こさない。それは人間と言うのは、わたしは金星の人間ですけど完璧な身体のラインはマネキンみたいで、つまり人形みたく温かみのないものに見えるという事です。

金星にもミスワールドの美人コンテストがありますけど、

参加資格は九百歳まで。地球では水着までだけど、金星では全裸、オールヌードになりますし、審査員の前で仰向けに壇上で寝そべり、両脚を大きく広げてマンコが完全に見えるようにします。

審査員は全員男性ですが、九百五十歳以上で性的に不能となった紳士ばかりです。そうしないと冷静に金星の美女のオマンコを見てられませんよね。

五人の審査員は、十人の最終選考に残った全金星の信じられないほど美しい女性が全裸になって、金髪の恥毛を舞台上でなびかせて歩いているのを見ます。

ふわっと逆立った金髪のアンダーヘアを持った人もいて、女のわたしでも興奮しそうな眺めです。まんこの周りの毛が薄い美女は、縦のスジは丸見えで歩きます。金星人の美女もオマンコは縦にスジが入ってますのよ。地球人と同じ。

壇上に横に整列すると、一人一人、金星各地の美女が裸のまま出て、さっき云ったように審査員の前に寝そべり、美しい白い両足を広げてオマンコを審査員の老人に見せます。そ

の時に完全に均一対照なオマンコは、それは人間だからいませんけど、それに近いオマンコを持つ美女は優勝できません。

わたしは、その時、誰ももっていなかったオマンコの左右のビラビラの大きさの違いを持っていた。審査員の一人は、それを見ると、

「おお、美しいオマンコだ。S分の一のゆらぎ、ヴィーナスの微笑だね。あー、私が百歳若ければ、君と一日中オマンコしまくるよ。仕事も何も休んでね。」

そうマイクで会場中に響く声で語ると、溜息をつき、ニヤリとして黒縁の眼鏡を触りました。この眼鏡は地球のものより進歩しています。地球の眼鏡のように耳に掛けないんです。耳の上で浮いているのです。もちろん両耳に軽い磁石を貼っています。眼鏡の耳に掛けるところには同じく磁石があります。

磁石の同じ極の反発する力を利用しているのです。

会場には若い男性もいて、最前列は審査員で占められていますが、二列目からは八百歳以下の男性もいて、地球人にす

れば二十代の男性ですから、わたし達のヌードを見ただけでチンコを立てているのがステージから見ても分かります。それを見て、わたしたちも感じる時はあるし。ハンサムな金星人男性も背広にネクタイで見てますけど、白いズボンの股間はパンパンに張り出していて、あのハンサムな男性の勃起チンコをしゃぶりたくなっている各地の金星ミスもいるんじゃないかしら。

金星人は皆、白い肌で堀の深い顔、地球では白人と呼ばれる人種の体です。勃起すると二十センチのチンコが多いのです。わたしは数百年も金星の男性とセックスしてきましたから。

地球人のセックスが、できる期間は短いわよね。

さて、金星各地からの美女のマンコを見まくった審査員の方々は、あそこが立たないので美的鑑賞をただけ、でも、動的マンコのゆらめきを長い男性的人生で得た審美眼を持って金星一の美女を決めなければなりません。

そのためには!

必用なのですわ、勃起した男性のチンコが。しかし会場の若者は、わたしたちに接する事は許されてはおりませんの。

地球の日本で行われていたストリップショーでの本番など、金星のミスコンテストでは出来ませんものね。

だから最終審査で行われるのは、わたしたち金星の美女の究極の象徴、すなわちマンコにおける動的生態の黄金分割的美的展開が視的に認知される瞬間におけるパラダイスの変容とかが重要な審査基準となるべく協議される事となるのですわ。

ホップ、ステップ、ジャンプと言う具合にマンコが濡れそぼって、男の膨張チンコを受け入れるのが連想される状態にしていかなばねって事。

科学的技術が地球の何億倍も発展した金星では、いまだバイブレーターなど幼稚なおもちゃで遊んでいる地球とは違

って、人間、というか金星人の勃起二十センチチンポとそっくり同じな肌触り、硬直性を備えた地球ではバイブレーターと呼ばれるものが、あるのよ。

しかも、マンコに接すると先走り液、カウパー腺液まで出てくるという、そこにはマイクロコンピューターが埋め込まれているのですが、そういう優れもの。日本のロボット産業もまだまだ、そこまではね、って感じですよ。

わたしたちも、それ、ビークリンって金星語では呼ばれますけど、百歳までは使う事もあるのね。未婚の女性が多いから。でも、百歳までには大抵の金星女性は結婚します。

結婚するまでは処女を守る女性が殆どですから。金星ではね。今の日本では女子高生に中出しする男も多いそうね。トーキョーの条例では違反だけど、女子高生とラブホテルでセックスしても気づかれないものみたいですね。

金星からはね、天体望遠鏡で日本のトーキョーまで見れますの。さらにはね、ラブホテルの中まで見れるし、そんな望遠鏡は金星の百円ショップで買えるから、誰でも見えています

けどね。

この前も暴走族の兄ちゃんがベッドに制服のまま座った女子高生に勃起させたチンポをしゃぶらせていたけど。

あ、トーキョーでは黒人の勃起チンコをしゃぶる女性が日本一多いのも金星では話題になっています。第二次大戦までは世界でも有数の貞潔な女性の多い日本国女性だったのにな。これは金星で何処の大学でも宇宙学部日本国学科で講義されています。

第二次大戦以前から金星で教えている日本学教授は、最近天体望遠鏡で日本のラブホテルを観察して黒人のチンポをしゃぶるトーキョーの女性に腰を抜かしたらしいけど。

まあアイスクリームにも黒いの、ありますよねー。商品の名前をいっそ、黒人のチンポ棒とかにしたらトーキョーのOLが買い占めますわ、きっとね。

若い時から黒人のチンポ、味わえました。わたし、東京生

まれです。なんていうトーキョーの女性も多い事ね。日本の首都、ご苦労様。

あら、脱線してしまったみたい。金星のバイブレーター、ビークリンの話に戻りますわ。

審査員長が一人一人の金星美女、本当に綺麗なのよ、ハリウッドスターよりも百倍は綺麗なミスのおまんこにビークリンを挿入します。

「アナアッ、イラッ、イテッ、イテッ!」

と金星の地方語で悶えてしまうミスもいるのです。でも、処女膜は破らないようにします。

単純に悶え方が激しいから、と一番にはならず、クリトリスの形状も詳細に観察されるのです。

さすがに、ここまでやるので金星の通信網で実況される事はありません。それでも応募に躊躇う美人も多いわけですが、ミス金星の賞金額は何と日本の今の時価(2014/12/24)現在にして百億円なのです。金星は裕福な惑星とはいえ、今の

アメリカより二倍は豊かという程度です。科学は進歩しましたが、それは新技術の特許を取った人達が大儲けしているだけで、地球とあまり変わらない経済情勢なのです。

金星人だと主張している地球人オムネク・オネクの言うような、お金に価値を置かない世界ではないのです。

カジノもありますし、ソープランドもあります。金星人は長寿ですが夫人に先立たれる場合もあるし、未婚の男性を相手にしている玄人の金星女性もいます。

日本に限らず地球上の性のプロの女性、昔なら売春婦と呼ばれた女性は寿命が伸びた今でも働ける時間は延びないのです。それは地球の女性が五十歳あたりで閉経する事によるものでしょう。いくら遊びとはいえ、子供は産めないし、体にも張りがなくなる。

それに対して金星の売春婦は数百年も働けます。外見と中身は二十代が続きますから。それでは金星は人口爆発しないかって思うでしょう。それが、神様の配慮か金星女性は妊娠可能な胎児は二人まで、と決まっています。長い間には少し

ずつ人口も増えてきたのですが、産児制限をする人もいて、それほど金星の人口は増えないでいます。

金星の法律は変わっているのだ、地球とは違って。一応、公然猥褻罪はあるのだが、局部を見せなければ公衆の中でセックスしていい場所もある。できないのは公的な場所、役所や裁判所などである。

それらから五百メートルは離れた民間の施設、例えば喫茶店、デパートでも陰部を隠せばセックスできる。これは近年、人口が減少しつつある金星の或る国で最近行われた施策なのである。現在の日本と状況は似ているが、金星のその国ではこの大胆な政策が議会で可決された。

カーラ・オパルの住んでいる国は地球のアメリカのような大陸なので、人口減の現象はあまり現れない。その陰部を隠していれば公然とセックスできる国は日本と似た島国である。金星に海はあるのか、という事だが勿論ある。ただし、

海の色は緑色、海面の温度は三十五度で風呂に入っているような状態。金星には冬はなく夏は地球上の気温にして四十度は超えるため、八月は会社も学校も公的機関もすべて休みとなる。裕福な人達は地球の北極、南極に相当する金星の大陸、地球では北極は大陸ではないが金星では北極は大陸である、に別荘を持ち、二十度位のその大陸で優雅に暮らすのだ。

が、今は冬、金星では大体二十度が平均気温だ。公然とセックスできる国では喫茶店でセックスする人が多い。

日本に似たその国の男女、五百歳になっても子供が出来ないので焦っていた。女性の名前はパメリン、男性の名前はアルダートだ。

パメリンはロングの金髪に大きな胸、アルダートは逞しい肩を持つ筋肉質の肉体を持つ。彼は地下街で歩きながら彼女に、

「最近、消費税も上がったからラブホテルにも行けないな。」

と囁く。彼らはまだ結婚していない。その国は長いデフレと不景気に悩まされていたのだ。首相はカベが長期政権に入ろうとしていた。

パメリンは、

「でも、公共セックスができるようになったわ。」

と少し恥ずかしげな顔をしてアルダートに流し目を送った。彼はドキンと心臓を高鳴らせたのだ、まだあまり公然とセックスは行われていなかった。それで黙り込むと、彼女は、

「いくじなしなの？子供が出来たら、わたしの実家から結婚資金がもらえるんだから。」

「うん、そうだね……。」

「あんた、長く持たないじゃない、セックス……。」

「大きな声で言うなよ。地下街だ、ここは。」

「じゃあ、わたしのおっぱい揉んでみて。」

「ああ。」

アルダートは左手で軽く彼女の胸を服の上から揉むと手

を離した。

「ああっ、感じるっ。」

歩きながら彼女は小さく叫んだ。そして二人は立ち止まる。しかし、流れるように前へ進む二人。そこからは自動遊歩道なのだ。地下街でかなりの範囲は遊歩道である。そんなに早く動かないので、店にも入りやすい。

パメリンは、

「あっ。あそこの人達!一メートル位、浮いてるカップルだね。」

と話すと、指差した。アルダートが眼を向けると、遊歩道の上を中年男性と若い女性が手をつないで地下歩道から一メートル浮き上がって、遊歩道と同じく前へ進んでいた。アルダートはニヤリとすると、

「あれはね、クレジットカードのプレミアムコースに入ると、提携の地下街とかで空中に浮き上がる装置をもらえて、それを靴の裏に張れば浮遊できるんだ。」

カメレオン・エクスプレスという地球の言語から取った社名のクレジット会社らしいけど。」

パメリンは肩をそびやかすと、

「そうなのね。お金持ちって、いいなあ。」

と慨嘆した。

「あの中年の男性と若い女性は夫婦じゃないみたいだね。」

「海の向こうの大国みたいにみんな二十代の若さなら、いいのにね。」

「あー。そうだね。わが国は、そういう医学が遅れているし、その若さを保つ薬は結構高いからな。」

「この国では、地球と同じ百歳ぐらいまでが金星人の平均寿命なのにな。」

「いいじゃん。その分、若いうちにセックスをしておけば。」

動く遊歩道から喫茶店に入った二人は、奥の席に座って飲み物を注文すると、アルダートの太ももの上に座ったパメリンは、大きめのバッグからバスタオルのような長い布を自分

の下腹部に掛けて、股間が見えないようにした。彼女は後ろを向いて彼とチュッとキスをすると大股を開き、すでに勃起した彼のイチモツを右手で握るとスカートの下はノーパンの股間の割れ目に導いた。

すでに彼女もびっしょりと割れ目を濡らしていたので、彼の肉棒はスナリと彼女の伸縮自在の柔らかいふくらみの中に入って行った。

「あああっ、こんなとこでっ。」

パメリンは感じるままに声を上げていた。店の奥とはいえ、そこは人の出入りも激しい場所の一角だから、まわりの客は仰天していた。でも陰部をバスタオルで覆っているから公然猥褻罪には、ならないのだ。乳房も見せられないので上着を着たまま、二人はつながっている。パメリンの方が腰を上下に振ってアルダートの性欲肉棒を激しく擦った。その感覚がアルダートには、たまらなく揺さぶられるものがあり、その店の客の全員が注目しているのも彼には分かるし、イクのは早くなって、

「あうっ、飛ぶっ。」

と金星語らしい表現で叫ぶと、といってもこれは日本語に翻訳しているわけだが、大量の黄色い液体を彼女の膣の中に迸らせた。

精液が黄色いというのが地球人と金星人の違いなのだ。それに血液の色は白い、というのも面白い特徴ではある。

遅ればせながら、筆者の自己紹介をしよう。冴えない四十代で、時々、電子書籍を出している。が、売れ行きもやはり冴えない。そんな自分だが、神様は見捨てなかったのだ。

日本人で日本に住んでいるけど、何処とは書かない方がいい、と金星人に言われたのだ。ぼくのように想像力の乏しい人間が金星人の話など書けるわけがない。で、あるからして、この小説と銘打ったものは実は僕が遭遇した金星人の記録した日常、かなり露出狂ともいえる金星人の描く実話を、しかもご丁寧にも金星人が日本語にしてくれたものを、そのままワードにタイピングしただけのものなのだが、この『金星の

女』なのだ。

最初のうちに暴露しておいた方が僕の良心も痛まないで済む。その金星人は白い円盤に乗って帰った。地球人の感覚なら血の色の赤の円盤というところだろうね。

さて、日本語にまで訳されているからタイプするのは楽ですよ。次に行こう。以降の話に行こう、なんてね。

アルダートとパメリンが腰を震わせているのを喫茶店の客は、

「おー。」

「すごいねー。」

「あたしたちも、やりたい。」

と各自、ためいきと賛辞の言葉を投げていた。

金星は厚い雲に覆われているため、雲の下は地球人には分かっていないのです。実は、その厚い雲が地球よりも近い太

陽光線を遮っているのだ。地球にしたってオゾン層などがあり、それが少し痛んでいると話題になったりするでしょう。金星の厚い雲は相当なもので、地球の科学では当分、突き抜けられないでしょうね。

そのためか金星人の肌は白いのですよ。金星には黒人や黄色人種は、いないのです。最近、地球の迷科学で全ての人種はアフリカから来たなどと馬鹿な説を出していますが、二十世紀も過ぎていのにどれだけ地球の遺伝学者が馬鹿なのかという格好の証明ですね。

真相を云いましょう。実は地球の人種は金星人である我々の祖先が作ったのです。それで、我々の祖先は宇宙船で地球に降り立ちましたが、人間は各大陸を捜して回ったが何処にも見当たらない。最後にアフリカを訪れると黒人が、いたのです。

「おい、黒いのがいたぞ。」

「ああ。地球の人間は黒いのだけだな。」

「うーむ。いかほど我々と違っているか。知性も全くなさ

そうだな。」

「そうだね。金星で研究中の人体改変手術を加えて見ないか。どうだろう。」

「そいつは、いい。この黒いのを肌を白くしたりできる。又、金星にはいない黄色の人種も作れそうだ。」

「ついでに各人種の知能程度も操作しよう。」

「そうだね。どの人種も同じなら面白くないや。」

「黒い肌は金星人と正反対だから知能は低くしよう。」

「黄色は、その中間か。」

「それでは不自然だ。黄色いのは、その中に白い肌よりも優れた頭脳を持つやつを一部、入れる。昨日、空から見た島国があったじゃないか。四つの大きな島でなっている……。」

「ああ。気候の良さそうな島だね。」

「ニッポンと命名しようよ。そして、それをこの島国に入れる人間に教え込む。」

「素晴らしいな。白い肌より優れた頭の黄色い人種。全部

ニッポンに入れるのか。」

「いや、ごく一部、そうだな、十パーセントにしよう。あとは働くのが好きだけど頭はよくないのを九十パーセント位にしようか。」

「それはニッポンに、だろう?近くにある大陸に大勢の頭の悪い黄色い人種を入れたら、どうだ?」

「そいつは、いいや。将来、その頭の悪い大陸の黄色人種とニッポン人は戦争をするだろうな。」

「うん。だが仲裁役は白い肌の人種にさせるようになるか。」

「そうしよう。なんという人間開発か!」

二人の金星人は部下らしき十人に黒人を捕獲するように命じました。

その間、二人は人種変化の薬を調合していたのです。

素裸の黒人の男女が十組ほど連れてこられました。彼らは勿論、まだ言語を知りません。

「よーし。女の股を開かせてマンコを男に見せろ。まずは最初のカップルからな。」

と一人が部下に命じます。部下は拳手の礼をして、

「マイマイ、キー。」

と金星語で答えて黒人の豊満な乳房を持つ女を地面に寝かせると、しなやかな黒い足を大きく広げました。するとピンクのオマンコが、少し口を開けて露わになったのです。

腕を取られて立たされている黒人の男も裸で、女のマンコを見るとすぐに長めのチンポを立ててしまいました。

黒人の男は腕を取られていた金星人に押されつつ、手を離された。野性の本能だけで生きていた黒人男は女に重なると充血したチンコを挿入して、摩擦感を楽しむように腰を前後に振ったのです。

それを見た金星人は、

「おー、ようやるなー。おれたちが見ていても羞恥心もない。言語もない。彼らの脳のレベルをアップしてやろう。」

と同僚に話しかけます。

「もちろんだよ。将来の地球人は人間が進化したのは二足歩行のため、なんて馬鹿げた推論を出すだろう。進化論なんて馬鹿な奴が書くかもしれない。でも、あの黒人どもは二足歩行だ。二足歩行なら知能が発達するなんて、ありえないよな。」

「おれ達は金星で脳科学が専門だった。サルを二足歩行させずに脳をパワーアップした事も、あったよな？」

「あったよ。あれは面白かった。そのうち脳パワーのレベルを様々に分けて進化させたね。」

「それが今、この地球で彼ら黒いのをレベルアップし、更に白人と黄色人種も創生する。これが現時点での、おれたちの仕事だぜ。」

二人は深くうなずきあった。部下の金星人達は賛嘆の目で上司を見ている。

かくして地球の人類は大別して三種に創造されたのである。金星人の肌は白い。その分、白人の脳には有利なものを多くつめた。住む地方も頑張りたくなるヨーロッパの適当に寒いところへ宇宙船で連れて行った。アフリカの暑い地帯には黒人をそのままにした。

幹部金星人は、

「おれたちを地球人は将来、神と呼ぶだろう。」

と宇宙船の最前席で横の幹部に話しかける。窓の外からは青い地球が見えるのだ。

「そうとも。金星人のおれたちが太陽神ラメリヤを崇めるようにな。」

やはり人間は進化した猿では、なかったのだ。サルは何億年経っても猿でしかない。地球人の脳をレベルアップさせ、黒人から白人と黄色人を作った責任からか、金星人は爾来、地球をいつも観察している。

白人といえども、元々はアフリカの黒人から作られたものなので宗教なども持たず、道徳もなかった。宇宙船、それは今見るように円盤形なのだが、そこから地球の上空八百メートルほどより金星人は当時のヨーロッパを手取るように調べていた。

「おい、地球人に宗教を作ろう。そうしないと荒れ放題だよ。いところ同士、セックスしたりしているから。」

「うむ、そうだね。そうしないと人類は劣化するみたいだな。」

ヨーロッパに宗教を広めるには白人の教祖では、面白くない。それで彼らはイスラエルの上空に飛んだ。エルサレムに来ると、低空飛行で市民を見る。

「おお。あの女、いい尻してるぜ。」

金星人は涎を垂らしそうだ。

「どれ、あー、あの女だね。おっぱいも大きくてタマラ

ナイ体だ。」

「おれが、やってもいいか?あの女と。」

「ああ。惜しいけど先に見つけた、おまえの勝ちだ。サタニクス君、行ってこいよ。」

「ようし。もう、チンポ半立ちだからな。」

金星人サタニクスは円盤から降り口を開け、人口反重力磁力を浴びつつ、ゆっくりとエルサレムに降りた。円盤から見た美人のすぐ近くに。周りには人もいなかったのが金星人サタニクスは気づかれなかった。彼は、その美人の後ろから声をかけた。すでにヘブライ語は知っていたのだ。

「シャローム。美人さん。」

振り返った女性は、目の前に二十代の美男子が白い服を着て立っているのを見た。股間の辺りが膨らんでいるのも見たのだ。彼女は処女だったが、男のチンポが女に性欲を感じると大きく膨らむのは母から教えてもらって、すでに知っていたのだ。

マリア、彼女の名前、は、そのあたりでも有名な美人だった。が、まだ処女だったわけだが。

(美男子がチンコ半分立てて、わたしを見ている)

そう思うとマリアはウフフ、と含み笑いして、

「シャローム。あなたは誰？」

「わたしは金星から来たのです。わたしは、あなたがたが知らない存在。つまり、神なのですよ。」

(うっそだー、神はエホバではないのかしら。チンコ立てている美男子が神なんてねー。)

とマリアは思ったが、その男が近づいてくると矢張り何処か不思議な感じがした。

「信じていませんね?私が神であることを。あなたの名前はマリアでしょう。」

(どっきゅーん!当たっているわ、この人はエホバ様かしら?)

宇宙船から降りる前に金星人サタニクスは小型のタブレ

ットのようなものから、マリアの脳内の記憶から彼女の名前を探り当てていた。当時の金星の科学、具体的には脳科学は、或る特定の電磁波を脳に向けて放射し、その反応から記憶されている言語を読み取る事に成功していた。さらにそれは反射されてタブレットに、その文字が写されるという発明までしていたのだ。

サタニクスは畏敬の念を浮かべたマリアの手を取ると、

「あの物置の陰に行きましょう。誰にも見られないところで奇跡を見せます。」

確かに彼の手は人間の手とは違った感じがマリアには、した。

(神様みたいで美青年、おまけにチンコは半立ち・・・)

マリアは戸惑いながらも、その青年とともに大きな物置小屋の裏に回った。

彼は彼女から手を離すと、

「地面から浮き上がるよ。」

と宣言した。

すると、どうだろう。両手を肩から水平に広げたまま、彼の体は上へ浮き上がった。股間は前よりも膨らませて。

マリアは生まれて初めて見た。空中に浮いた人間を。いや、人間ではなく神様なのよ、この青年。

サタニクスは、

「どうだい?わたしが神であることが分かったかね?」

少し離れた場所からマリアは答えた。

「ええ、間違いなく神様です。あなたは。」

同時に、その場に跪く。少し脚をひらいて座ったので下着のない当時はマリアの陰毛とマンコは丸見えとなった。

サタニクスの空中浮揚はズボンのポケットの中にある反重力波動装置によるものだ。これは金星では安い価格のおもちゃである。

跪いて手を組んだマリアの穢れなき陰毛はカールしている。それを浮揚したまま見たサタニクスは肉欲淫棒を八十パ

ーセントに硬直させて、

「マリアよ、来なさい。立ち上がって、わたしのズボンを脱がせるのだ。」

「はい、神様。」

彼女は従順に迅速に行動した。サタニクスの白いズボンをベルトを外して丁寧に下ろす。黒いパンツを履いていたサタニクスの股間は今や九十パーセントは勃起している。下着など見た事のないマリアは、

「まあ、神様は人間と違ってズボンの下に衣装を纏っていらっしゃるわ。もしかして、この下にあるものはチンポなのですか?」

敬虔な眼をしてサタニクスの股間の膨らみを見詰める。

サタニクスは笑顔で、

「さよう。マリア、わたしはおまえの美しさにチンポを立ててしまった。さっき、おまえのマンコを見たのだよ。」

「まあ。神様、わたくしめは人間の女ですわ。」

「なーに構うものか。ギリシア神話にも神と人間の女が交わる話が、あったろう。わたしもマリア、おまえのマンコにわたしのチンポを入りたいのだよ。」

「まあ。」

マリアは頬を薔薇のように赤らめた。少し俯く彼女にサタニクスは、

「その黒いものも降ろしなさい。」

「はい。」

彼女はサタニクスの黒いパンツを降ろした。サタニクスの膝下にズボンとパンツはある。

飛び出たのはスコンと上を向いたサタニクスの肉棒だった。大きなキノコにも見えた。

マリアは、

「きゃっ。」

と叫ぶと両目を両手で閉じる。今時の若い地球の女は、こんな事をしないだろうけど。

サタニクスは命じる。

「わたしのものを、しゃぶりなさい。」

マリアは両手を目から外すと、

「ええっ?!そんな事・・・。」

「いいのだ。神様のチンポをしゃぶれるのは今の地球では、おまえだけなのだ。」

「あ、はい。光栄なのですね。」

彼女は両手をサタニクスの雄雄しいチンポに優しく添えると、口の中に咥えた。生暖かくて、香ばしい。処女ではあるけれど、これから先、このチンポを自分のマンコに受け入れるのか、と思うとマンコを少し湿らせてしまった。

今や百パーセント、サタニクスのチンポは勃起した。マリアは、たどたどしくサタニクスの肉欲棒をフェラチオしている。彼女の舌の柔らかさも心地よいものだった。

「マリア、わたしのズボンと黒いものを足から降ろしなさい。」

「ブチャ。」

と音を立てて彼女はフェラチオをやめ、口から淫慾棒を外すと、両手でサタニクスのズボンとパンツを降ろした。それが足から抜けると、ストーンと彼は地面に立った。あそこも立てたまま。

マリアは着地した神を敬虔と性欲の入り混じった気持ちで見上げるのだった。

「マリアよ、神の子を産むのだ。」

「はい、神様。」

と答えて彼女は眼を閉じた。処女らしく。サタニクスは彼女の唇に自分の口を重ねて貪るように吸った。マリアは、その唇に地球とは違う異次元な感覚を受け止めた。これが神様なのだ、と。

確かにサタニクスを初め、金星人は金星の物質から出来ているので地球人の肉体とは若干違う。でも、それはチャンポン

の麺と焼きそばの麺との違い程度である。

深くディープなキスをした後、サタニクスはマリアの赤き唇の中に舌を入れて絡ませた。彼女は初めての男性が神様だとは、生まれてから一度も思った事はなかった。現代でもそう思う女は、いないだろう。

イスラエルの荒れた大地の風が弱く吹いてくる。

サタニクスはマリアの腰布を取ると、彼女のまんこに右手を当てる。金星人の手が触れたわけだが、彼女は神様の手と思っているので、

「あっ、勿体無いです、神様。」

とサタニクスが唇を外した瞬間に声を上げた。

「ふふ。指マンだよ。天界では私は指マンのテクニシャンとして知られている。」

「あふっ。女神様にもマンコがあるのですか。」

「当たり前だよ。人間は私達が作ったのだから。」

「まあ。聖書に書いてあるとおりですね、やはり。ああん。」

サタニクスの指はマリアの処女膜に触れたのだ。

「いくぞ。マリア。」

「はい。神様。」

と答えて脱力する彼女の体を膝の裏で抱えると、サタニクスは駅弁ファックの体位を取った。すでに彼女の下半身は全裸で、真っ黒で豊富な陰毛がボウボウと伸びている。

サタニクスは隆起した肉棒をマリアの開いた淫唇に、うずめていった。

「はーん、いやっ。」

とマリアは喘ぐ。処女膜をサタニクスの淫欲棒が突きぬいたのだ。これから先、何百年か後には聖母マリアとして崇められる若き女性のマンコを。

少し出血した彼女のマンコをサタニクスは執拗に肉棒でピストンする。と同時に左手で彼女の尻を持って支え、右手で上着を脱がせると、たわわに実ったマリアの乳房を掴み、形が歪むように揉みしだいた。

「ああっ、あっ、あっ。かみさまー、感じちゃうー、まんこ、こわれそうー。」

と後の聖母マリアは神様とのセックスに巡り合うのも自分の信仰の深さを表すものだ、と内心得意になっていたのだ。それに人間の男より神様は異次元のセックスの喜びを味合わせてくれる。それは日銀の異次元緩和の数億倍の喜びであろう。イスラエルなのでイスラエル銀行での金融緩和の異次元緩和と表現したほうが正確なのであるが。

Bank of Israel

というサイトもある。

サタニクスの腰は風を切るほど早く振られ、なめくじのようなマリアのマンコは彼の激張した男欲根に絡まり付き、軽く締め上げると彼は、

「おおっ、出すぞ神の祝福を。ほーら。」

ドドドド、ドピュッ。ドドド、ドピュッ。

と二度もサタニクスは処女だったマリアのマンコの中に中出しした。彼女は子宮にそれを受けて、口を開き舌を少し出した。その後、聖母などと呼ばれるとは思えないエロティックな構図だ。その体にはサタニクスも、もう一回戦を考えたが二度出しは割りとキンタマに答えたらしく、

「マリアよ、これでおまえは妊娠する。神の子をな。」

と語りかけると、ちいさくなったチンポをマリアのマンコの中から取り出した。

マリアは嬉しそうに微笑する。

サタニクスはチンポをズボンにしまうと、

「だが、やらねばならぬ事がある。それは・・・宇宙船でやろう。服を着なくてもいいから、手に持つように。」

と指示すると、胸のポケットにある UFO への連絡ボタンを押した。五秒もせずにオレンジ色の光を発する円盤型の物体が二人の前に着陸した。

UFO の正面の壁がエレベーターのように左右に割れた。サ

タニクスが乗り込む後ろからマリアがついていくと、壁が閉まって青い色の服を来た医者らしき金星人が二人向こうの壁のドアが開くと眼に映る。医師の一人はマリアに近づいてきた。(この人も神様なのかしら。なんか医者みたいだけど。)それから自分が腰布をつけてなくて、手に持っていてアンダーヘアもオマンコも丸見えにしているのに気づき、腰布を陰部に当てて隠すと医者は、

「隠さなくていい。そのまま来てくれ。君が隠したところを手術するようにサタニクス様に命じられたのでね。」

「はあ、なんの手術ですか。」

「いいから来なさい。こっちだよ。」

円盤内の別の壁が開くと、緑色の壁の部屋が見えた。二人の医師にマリアは遅れて入ると、その部屋の中央に白いベッドが六脚の支えによって固定されていた。一人の医師がマリアに向けてペンライトのようなものを向けると、先端から黒い光が放たれて彼女の額に到達した。すると突然、彼女は意識を失って倒れこんだが、そこにはベッドがあったので、それ

に寝そべる格好になった。

右肩を下にした姿勢の彼女の左足を取ると、医師はベッドの上で彼女を大開脚させた。すると股間に浮き立った剛毛の陰毛の下に、ピンクのマンコの縦スジが見えて、処女を失ったばかりの新鮮さが魅力的だ。

マリアの破れた処女膜を、金星の特殊なメスで医者は丁寧に縫い上げていく。すると、どうだろうか!

縫い終わった彼女の処女膜は、すっかり元に戻っていたのだ。処女懐胎した聖母マリアの誕生だ。

医師は深い湖のように微笑むと、

「うまくいった。眼を醒まさせてやるか。」

と助手らしき医師に促すと、

「はい。地球上では彼女が聖母として仰がれる日が来るでしょうね。処女で懐胎した人類で唯一の女性として。」

「サタニクス様は、生まれた子供にイエスと名づけるようにと指示された。さあ、聖母の眼をあけてやれ。」

「了承しました。」

助手は金色のペンライトを静かに眠るマリアの額に向けた。
黄金色の光線が細く一筋に彼女の小麦色の額に降り注ぐと、
マリアは両目を開けて、

「終わりましたか?手術は。」

主任らしき医師は、おもむろにうなずくと、

「あー、終わったよ。君のマンコは処女に戻ったのだ。」

マリアは二つの眼を満月にすると、

「えええーっ。処女のオマンコにですかあ。信じられなーい。」

「触って御覧よ。君のマンコに。」

「え。ええ。」

彼女は頬を赤らめつつ、右手の指をマンコに当ててみると、

「ほんとですね。先生、何かオナニーしたくなっちゃって。」

「ああ、いいとも。やりなさい。ただ、処女膜を破らんよう
にな。」

主任の医師は両手を腰の後ろで組んで、一步、離れる。助手の医師も同じ行動を取ると彼女をさりげなく見守るようにした。その二人にマリアは、

「なんか見られると恥ずかしいですわ。」

と頬を赤くするのだ。

主任医師は、

「構わんとも。わたしらは医者だよ。危険のないオナニーか、見守ってあげよう。ついでだが、金星の女たちは、自分たちの長い髪でマンコをさする事もある。君は今は無理なようだが、ね。」

「うふふ。すごーいですね。なんか、むずむずしてきて……。」

彼女は両の太ももを大胆に大きく開くと、ピンクのマンコに華奢な右手の人差し指を柔らかく当てて、上下にさする。

「あん、ああん、あはっ、かみさまあ・・・。」

彼女はサタニクスとのセックスを思い出して、オナニーしたのであった。

それからイッたのは覚えているが、それからの記憶は彼女にはなく、気がつくと自宅のベッドで服を着て寝ていた。腰布もちゃんと着けて。

数ヶ月もすると、彼女は自分が妊娠した事に気づいた。記憶を辿ると、

「わたし、神様とセックスしたわ。確かに。フェラチオもしたと思う、きっと。」

と、ひとりごとで話した。

サタニクスのだでかい真羅を、マリアは昨日のように目の前に見るのだ。

自分が妊娠したのは神からの恩寵だ、とマリアは村人に語った。その時に集まっていた人々は、嘲笑した。

「おまえが父なし子を孕んだのを誤魔化すためだろ。」

「あー、そうだそうだ。マリアって綺麗な女と思っていた

けど淫乱だったんだなー。わしの息子には嫁にもらえんぞ、
いや、こりゃ全く。」

「処女で妊娠したなんて嘘つきやがって。」

マリアは右手を大きく回すと、

「みなさん、静かにしてください。今、わたしを見てくれ
た、お医者さんが来ます。」

と高らかに宣言した。すると白い服を着た若い医者が出て
きて、

「みなさん、マリアさんが妊娠しているのは本当です。し
かも、処女である事も本当なんです。医学的に証明できます。
これはユダヤ教始まって以来の奇跡ですね。モーセもびっく
りですよ。」

と又もや高らかな声で言い渡したのだ。聴衆は徴収されて
きたのではなく、ひまな日曜日にそこの広場に来ていたので、
真面目そうな医者が言った言葉に衝撃を受けた。とはいえ、

「でも、ありえないなー、そんなの。多分やったあとに、

くっついたんだろう。」

とヒゲ面の青年が口にした。

「あー、そういうのあるな。しかも、それは男の精液が固まったものだったりして。」

ふふん、と自分で話したその後で笑ったのは丸顔で目の大きな青年だ。誰もが処女が妊娠するなど不可能だ、と当時のユダヤ人でも思っていたのである。よってマリアと結婚する男など、いなかったのだが・・・。

トントン、カンカン。一日中、かなづちで木材を打ち続ける。大工のヨセフはハンサムな青年だった。それだけに女にモテたが、その噂が広まると結婚適齢期の若い女性は集まると噂した。

「ねえねえ、大工のヨセフってさー、ヤリチンなんだってー。知ってた？」

「ホホ。いい男だものねー。でも、それなら結婚相手には

無理だわ。浮気されっぱなし、なんて今から考えてもゾツとするわー。」

「そうね。やっぱり男は中身なのよ。」

「中身って、それ、チンコの事？」

「それもあるけど頭の中身もね。」

「ヨセフのあれって、太いのかしら。」

「太くても硬くないと、面白くないかもよ。」

「あらジュリエット。あなた、もう男とオマンコしたの？」

「まだ、してないけど。耳学問が凄いのよ、わたし。」

といった理由から、婚前の女性からすべて嫌われたヨセフは今度は人妻へと食指を伸ばすが、ユダヤの人妻もなかなか貞潔で現代日本の出会い系人妻とは訳が違う。

それでヨセフはある時、妊婦を誘ってみると、

「いいわよ。でも中出しはダメ。外に出してくれるんなら、

いいわ。あんたならテクニックがありそうだし、顔射がいいけど。」

「わかったよ。腹射になるかも。すぐ出そうな場合。」

「まん毛に射精になっても仕方ないわ。もう何ヶ月もセックスしてないの。おなかは大きいし、だんなが興味がないのは、わかるけど。」

二人は既に林の中の人目につかないところに立っていた。ヨセフは女の後ろに回ると、女の大きな乳房をまさぐると右手で女の顔を後ろに向けてキスをする。右手を乳房におろすと両手で豊満な女の果実を揉み捲くと同時に舌を女の口の中に入れて絡めると、やがて妊婦の乳首は硬くなるのだった。

「股を開いて立ってくれ。うしろから君のマンコに入没するからさ。」

「あー、いいよ。はい。」

美しすぎる妊婦は大股開きで立ちなおす。と、そこにヨセ

フの竹ざおのような陰茎が腰布を捲られた後に妊婦の黒茶けたマンコの中に深く埋め込まれた。妊婦といえど顔は美人だ。悩ましい顔をして、

「ああーっ、とても太いーっ。」

ヨセフは彼女の首筋を舌でなめまくと、

「旦那のモノと、どっちがいいかな？」

「あっ、子宮にあたるうっ。ヨセフのよーっ、もちろんだわ。でかくて硬いんだものっ。ああっ、マンコ壊れるーっ。」

二人は共に腰を振っていた。風は、そよとも吹かない林の中。落ち葉を踏みしめつつ、その日二度も妊婦と大工のヨセフは立ちバックでマンコした。

その体勢だったので、最後は尻射となったわけであった。口コミとは当時から力が強い。大工のヨセフが妊婦を好んでプレイするのは、いつのまにか主婦連の間には広まった事実だ。

マリアが洗濯物を干していると、隣の家から若い主婦のアルトリノが中東美女の顔を出す。

「あら、マリアちゃん。おなか出てきたけど、父親は神様だって本当なの？」

と問いかけてくる。マリアは、きつ、とした顔を見ると、

「わたしが嘘をついていると思うの？」

「嘘だなんて。あり得ない話だもの、そんな事。」

アルトリノの目は、しかし笑っていた。マリアは抗弁しても信じてもらえないとばかりに再び洗濯物を長い竿に干していった。洗濯ばさみのない当時は、洗った服の両端を結んでおくというのが一般的で、洗濯機もないから手洗いは無論の事である。

家事手伝いのマリアには一家の洗濯が課せられていた。アルトリノは再び大きな眼をして口を開くと、

「ねえ。妊婦になると男って普通、相手にしてくれないわよね。」

「え?ええ、そうね・・・。」

「でも妊婦マニアがいるのよ、この辺に。」

「そうなの。でも、わたし関係ないから・・・。」

「男の味、忘れられないでしょ、マリア。」

「・・・・。うん。」

マリアはサタニクスの隆起したチンポを膣感として思い出したのだ。アルトリノは人助けする顔で、

「それならね、いい人がいるのよ。大工のヨセフって呼ばれているんだけど。」

「大工さんか・・・でも、わたし処女だから。」

「二度も処女喪失できるなんて、羨ましいな。ヨセフの金槌みたいなチンコでガンガン打ち込まれてみたくないの?」

マリアはビュンビュン動く男の陰茎を想像して、

「なんか欲しくなっちゃった。その人のチンコ。ヨセフって独身なの?」

「独身らしいわね。よかったら、結婚したらいいじゃない。」

マリアの顔はハッキリとした。それはうす曇りの空が急に晴れていくような明度の転換だ。

だから口にする言葉も明るく、

「そうね。そうする。会ってみたいな、ヨセフという人に。」

と答えたのだ。

アルトリノの紹介でマリアはヨセフと会った。しかもヨセフの一人暮らしの狭い部屋で昼に。太陽は中天にかかり、SUN,SUN と熱と光を送ってくる。マリアの頬も上気して赤くなると、

「わたし神の子を妊娠しているの。しかも処女だわ。」

と打ち明けるとヨセフは、

「噂の人は、あんたか。信じられないけど、早くしよう。あんたの膨らんだ胸を見ていたら立っちまったよ。」

ヨセフはヌッとコーラの瓶のような勃起物を下の服から

取り出したのだ。マリアは、それを見ると涎が出そうになり、

「思い切り、突いて。」

と色っぽく誘うと、ベットに両手を突いて豊満な尻を突き出す。ヨセフは荒々しく彼女の腰布を剥ぎ取ると、艶かしい尻の肌の感触を両手で味わいながら、ピンクの彼女の貝のような膨らみ、そう、それは大きな二枚貝が少し開いたような形状をしている、その割れた隙間に祈祷するかのように亀頭を挿入した。

「あうんっ、痛いつ。」

彼女は声を上げた。貝の割れ目から赤い血がスラスラと流れている。ヨセフは、

「本当に処女だ。いいのか、もっと入れても？」

と彼女のスイカのような尻を掴んだまま聞くと、

「ええ、板痒い感じ、あ、なんか気持ちいい。擦り付けて。」

「おおーし。いくぞー。」

ヨセフはピストンを始める。パシンッ、パシッとマリアの

肌とヨセフの肌が触れ合う音を出す。外は明るく窓は開けっ放し、でも田舎だから人も通らないので安心だ。

勢いに乗って前後に揺れる二人の尻は少し汗ばみ、その汗は重なり混じるのだ。時々ヨセフはマリアの顔を顎で自分の右手の指で持ち、彼女の顔の向きを自分に向けるとキスをした。何度かするとマリアの方から積極的に舌を絡めてくるし、尻もユサユサと振り始めた。

金星人との初体験から少し経っていたが、ヨセフの男根の動きに二度目の処女を破られてから、ついに官能の喜びを覚え、

「ああっ、こわれるううう!オマンコ、いきそー。」

と大きな声を上げたのだ。これが後に聖母マリアと慕われる女性の生の姿では、あったのだが。

それでは、金星の話に戻ろう。金星は既に資本主義ではな

く、共産主義などという地球で起きた世にも愚かな制度など
できることはなかった。

圧倒的に金持ちが増えたため、税収は充分であり、その度
合いが高いため地球の馬鹿マルクスが考えた富の分配など
は貧乏人の奪取によるものではなく、金持ちからのありあま
る税金の納税で行われたのだ。

これこそ本当の富の分配であった。資本主義を悪とみなし
た頭の悪いマルクス君よ、君の愚にもつかない思想は貧乏人
が金持ちから強制的に富を奪い取る事から始まるソビエト
を生み出し、中国共産主義も作り出した。

これらは泥棒革命なのだ。

貧乏学者の哀れなオナニ的妄想は二十世紀の貧乏人ど
もを揺り動かし、米ソの冷戦状態にまで到ったのだ、という
のは地球では近年までの話。

金星では資本主義の究極が貧困をなくしたという超資本

主義であり、そのため別荘を持たない金星人は、いない。余暇も充分で、趣味はセックスという金星人も多いそうだ。

地球に飛んでくるのは政府系金星人で、一般の国民は余暇でセックスを長く楽しむ方が地球という遅れた野蛮な星に行くよりもずーっといい事なのだ。

だから金星の女はセックスを楽しむために美容に励み続け、美人が続出している。

それに驚くべき事には・・・。

カーラ・オパールは地球にしばらく移転するために、日本の区役所のようなところに行った。パスポートも取れるようになっていて、金星人とて全く自由に行動しているのではないのだ。ただ、ただなのだ。パスポート取得費は。何故かと言うと金星人の空間を増やすためには、地球のような星に行ってほしいのが金星連邦国の考えである。

金星には国は、この連邦国のみで軍隊も一つだけ。それで

は何が励みとなるのか、という事だが、他の惑星との仮想戦における訓練で日々、軍事力を鍛えているのだ。こういうところでは、やはり金星でも女性の入隊を許さない。今の地球の日本のほうが、女性自衛官もいるのでダラケテいるのかもしれない。

パスポートを取得する部屋は個室となっている。カーラ・オパールが入室すると、係官らしき若い男性が、俯いていた顔をハッとあげた。

「すみません。オナニーしていたものですから。」

と金髪の男は、金星人はみな、金髪、悪びれずに弁明した。

「いいのですよ。若い男性なら、仕方ないのね。でも勤務中じゃない、大丈夫？」

オパールは自分の金髪を撫で付けながら尋ねる。

「いえ、上司から許可されていますから。」

「許可?されてるのね。」

「ええ。オナニーして射精しないようにする訓練ですよ。
あ、住民票をお願いします。」

「はいはい、ここにね、あるわよ。オナニーした手で触る
のかしら。」

「ええ、大丈夫ですよ。手もペニスも消毒は、この部屋に
来て毎朝してますから。」

「そういえば、イカ臭い匂いもないわね、はい、住民票。」

金星の紙は地球と違って、薄いゴムのようなものである。
それにレーザービームのようなもので筆記する。このペンは
太陽光で充電されるのだ。金星は厚い雲で覆われているが、
特殊な衛星を飛ばすことによって地球よりも距離の近い強
烈な太陽エネルギーを、その衛星に取り込み、そこから金星
の地上にあるアンテナに送る。それを各家庭に送るのだ。

地球と違ってコストは、ほとんど不要。だから、電気代は
金星ではタダなのだ。

カーラ・オパールから受け取った住民票を係官は、地球のコ

ピーの機械のようなものに入れると、

「パスポートを作るのに、お金はいりませんが、女性の方にはオプションで逆にお金を差し上げることもできますが、ご利用しますか？」

と笑顔で聞くので、

「お金、くれるの?なら、もらいたいな。」

「わかりました。それでは、と。まずは、おっぱいを見せてください。」

カーラ・オパールは仰天して、

「ええっ。そんな事するのかしら。」

「もちろんです。金星を離れるのですから、地球の男に見られる事もあると思います。そういう乳房を当方ではカメラに記憶させてデータを作っているのですよ。よろしければ、ご協力下さい。」

(本当に区役所なのかしら。でも、お金もいいもんね。) そう思った彼女は、

「ええ、見せます。」

と答えて、上着を脱ぐ。すると、すぐさまパイナップルのような豊潤な乳房が、ぷるるんと出た。金星人はブラジャーをつけない。それは男に早く乳房を揉ませるためである。

これは昔の日本と似ている。最近、というか随分前から日本人女性もブラジャーを付け始めた。下着の下にである。とても面倒な話だ。この事が実は少子化や晩婚化につながっているのかもしれない。

なんとなれば、着物にはブラはないからである。

係官は涎をたらさんばかりに、

「ああ、いいですね。カメラに撮ります。」

パシーと音がした。どうやら係官の制服の胸ポケットに刺しているのが、カメラらしいのだ。

カーラは後ろを気にして、

「他に人が来ないかしら？」

「大丈夫です、今日はカーラさんだけです。金星外の惑星

に行く人は、滅多にいませんから。」

「それなら、する事はオナニーばかり?」

「てへへ。一応そうです。でもね、オナニー金星選手権に出場が決まったから、ここの役所としても便宜を払うとかいう事になりました。」

「スポンサーみたいな感じね。」

「そうですね、ここに回されたのもオナニーに励ませるためなんです。だから堂々とオナニーしてますよ。因みに昨日は誰も来なかったので、一日オナニー三昧でした。」

「ハハハ。ネタに困らないの?」

カーラは自分の豊胸をグイと突き出しながら聞くと、

「前日の夜見たアダルト動画を思い出しつつ、やっていますから。家には超高性能ダッチワイフも、この前の夏のボーナスで買いましたから、家ではオナニーより、このダッチワイフでバーチャルセックスできますよ。空想よりも現実的なダッチワイフですから。」

「へえ、そうなのね。金星の科学を使えば何でも開発できるわね。で、どんなダッチワイフなの?」

「はあ、それは……。」

係官は家に帰ると、金星では独身者でも家を国にもらえる。勤続五年が基本的な支給対象で、これは民間企業でも同じだ。

同じにしないと誰もが公務員に、なりたがるためである。

で、その係官、カリモ・テスタフは誰もいない家のベルを押すと、人間ではないそのダッチワイフがインターフォンで答えるのだ。

「あなた、おかえりなさい。」

「ああ、ただいま。開けてくれよ。」

「はい、少々お待ちくださいませ。」

と太古の大和なでしこのような受け答えをして、しばらくするとドアが開く。姿を現したのは黒髪を長く伸ばし、着物を着た美女が立っている。この着物は、百年ほど前に金星人が地球探査中に日本で買ったものなのだ。

目が大きくて眉は細いそのダッチウィフを彼は、クリコと名づけていた。カリモ・テストフは大学で地球学部日本学科を専攻していたので、日本語には通じている。因みに金星の大学は四十年制なので、彼が日本語ペラペラなのは当たり前かもしれない。

修学旅行みたいなものがあり、宇宙船で日本に行く。その時、京都で買い物をするわけだ。彼ら金星人は白人にしか見えず、京都の人々も白人としてしか見ないので怪しまれる事はないのだ。帰りは鞍馬山から飛び立って金星に帰るコースの時もある。

閑話休題、日本美女のようなダッチウィフに迎えられて、カリモ・テストフはご機嫌な様子だ。あんこ型で丸尻、少し脚は短めで身長も低めのそのダッチウィフ、クリコは食事の支度まではせずに寝室に先に行ってしまった。

簡単な食事を作れるロボットも金星にはある。ダッチウィフの脳に、それをプログラムするのは簡単とはいえ値段が高くなるので、ダッチウィフはセックス専用が開発されている。

オプションで食事を作れるダッチワイフにする事は、メーカーによっては提示しているが、その注文は、あまりないのだ。

カリモ・テスタフは自分で買ってきた食べ物を食べると、特製の飲み物を飲んだ。この飲み物の中には、男性器を強靱にする栄養素が入っている。

寝室に入ると窓の外にはピンクの月が浮かんでいる。もちろん金星の周りを巡る衛星はないのだが、各国で月のような物体を夜間、打ち上げている場合がある。それは地球探訪中、地球の夜には月が出ていて魅惑的だったので、更に魅惑的な情景を金星で作るため、ピンクの月が各国で打ち上げられたのだ。

クリコはベッドに寝そべっていたが、カリモの姿を見ると起き上がってウインクした。カリモはベッドに近づき、立ち上がったクリコを抱く。若い女の匂いが心地よく彼の鼻腔をくすぐった。柔らかな、又、日本女性らしい肌理の細やかな

肌に彼は即勃起した。

その固形がクリコの陰部に当たると、

「いやあん。立ってる。」

と恥ずかしそうにするのだ。こういう反応は、様々な状況を想定してクリコの脳とも呼ぶべき部分にプログラミングされている。その設定は一万の場面と言うから、相当なものである。

カリモは、益々興奮した。生身の女とは違う異次元の興奮だ。彼女の着物を剥ぐと柔らかな裸身、少し短めな脚と大きな尻がカリモの頭の中を滅茶苦茶に掻き回して性棒を巨大にする事だけを一点に考えさせたのだ。

その結果、ムクムクと鎌首を蛇のように擡げた彼の性棒はクリコの真っ黒なヘアに触れた。

「あ、はん。」

と恥じらいを感じた悶え声に彼は、ベッドにクリコを押し倒して強引に彼女の足を開くと意外にも抵抗なく大開脚し

てくれた。もう、マンコ丸見えでピンクの唇は大きく開き、彼の性棒の挿入を待っている。

カリモは急いで服を脱ぐと、野太くなった己の分身をクリコのマンコに挿入したのだ。

「やあん、いい。」

と深く挿入していく過程でクリコは大きく悶えた。とてもダッチワイフとは思えず、それというのも電力を充電しているので彼女の体温は人間と同じなのだ。カリモはクリコとディープキスをしながら、思い切り腰を振り、唇を離すとクリコの尖ったピンクの乳首を舌で転がした。

「ああっ。はあーん。やあん。」

と頭を左右に振った彼女の黒髪がバサバサとベッドのシーツに音を立てた。彼女の目はエクスタシーを感じて、閉じられていた。その痴態にカリモはクリコの膣内に深く収まった野太い亀頭から、大量の精液をどばっ、どくっ、と発射すると、その気持ちはスカーツとした気分浸された。高い値段だったが、どうにかすると金星の女の金髪のおまんこより

も黒い毛が性欲をより高める気もした。

その後、百八十度近く太ももを開脚したクリコは夫のモノを回復させたがっているようにカリモの首に寝そべったまま両手を掛けて、自分に引き寄せると柔らかい唇でキスしてきた。

それだけでもカリモは脳天に電流が走り、クリコの膣内の自分の分身を即、充血させると腰を振り、膣内を擦られたクリコは、

「気持ちいいっ。好きよ、あなたーん、ああっ。いくうーう。」

と可愛らしく激しく、大きな尻を振りながら悶えたのだった。

アダムとイブの神話も実は金星人が登場する。その話は、後からするとして今はカーラの質問に答えたカリモの答え

は、

「・・・日本女性のダッチワイフなんですよ。」

と短く簡潔に答えた。あまり長く説明しているとチンコが立ちそうなので、それは、まずい。

「ああ、おしとやか、とかいう地球の日本女性ね。で、パスポートの方は、もう、いいかしら。結構、わたし急いでいるのだけど。」

「あ、ええ。どうぞ。完了しました。」

機械から出てきたパスポートをカリモはカーラに手渡した。